

終末期のキャストの正体とその構成要素 1 一獣の変貌

まず、終末の悪の三位一体が、龍と野獣と偽預言者です。

このうち「龍」すなわち悪魔サタンは、総監督、シナリオ、演出担当で影の支配者です。ヨハネはこれを描写して「大きな赤い竜…七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。」と記しています。（黙示12:3）

また、この龍は「古い蛇」とも呼ばれ、最初の人間を欺いて罪を侵させたものであり、「おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く」（創世記3:15）

と宣告されているように、「女／女の子孫」に対して敵意を抱くものです。

女の子孫（胤）については、それ以来少しずつ明らかにされてゆきますが、サタンは、自分の頭を砕くことになる「女の胤」を攻撃し亡き者にするという執念に燃えて、そのための手立てを歴史の初めから創って来ました。

そして、ヤコブの子孫に対する攻撃を行うために、歴史上全部で7つの帝国（覇権国）をその手立てとして用います。

さて、そのサタンによる終末期のキャストですが、まず主役が、反キリスト＝獣＝北の王＝小さな角＝滅びの子＝不法の人です。

そして主役の「相棒」が「偽預言者」＝「地から上がる獣」です。

しかし、聖書を注意深く探つてゆくと、これらはそれぞれ単独の存在ではなく複合体であることがわかります。

まず、「獣」についてその正体、その構成を明らかにしましょう。

まず1匹の獣が海から上がります。（今後、分かりやすするためにこれを「海起獣」と呼ぶことにします）

「その獣は、ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口はししの口のものであった。竜はこの獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた。」（13:1,2）これには10本の角があります。

ダニエル書から、ヒョウ＝ギリシャ、熊＝メディア・ペルシャ、獅子＝バビロンであることがわかります。

しかし、頭が7つあるのに、似ている動物は3種類しか挙げられていません。

また、最後（4番目）のローマを表す恐ろしい獣に似ているところが無いようです。

しかも、各部分がそれぞれ、各動物に似ているのではなく、その獣の全体像は「ヒョウ」に似ていて、他に「足」と「口」に言及しています。

これは実に不思議なことです。

終末期である最後に上る獣の全体の特徴がなぜ「ヒョウ」なのでしょう。

むしろ全体像は、一見してローマである「恐ろしい獣」に似ているはずではないのでしょうか。

このことは、この少しあとで説明します。

まず、「7つの頭」があるのは、これは龍すなわちサタンが歴史のうちに登場させる世界強国「イスラエル人を攻撃するという限定された条件付き）を表すものであるということ

を理解するための記述といえます。

「その頭のうちの一つは打ち殺されたかと思われたが、その致命的な傷も直ってしまった」（13:3）

この一つの頭は、明らかに終末期に存在する最後の獣、復興ローマを指していることに間違いないでしょう。そしてそれが撃ち殺された、と言うのは、海から上がって来てから後の出来事と考えられます。

なぜなら、12章の最後の記述は、龍が「女」を大水で押し流そうとして失敗した後、仕方なくターゲットを別に向けて、「イエスのあかしを保っている者たちと戦おうとして出て行き、彼は海への砂の上に立った。」ということからすると、タイミング的には、天から落とされてすぐに大水で襲い、その後、海辺に立ち、そして「海から1匹の・・・」という記述から、「10本の角からなる一つの頭（「角」は実権（その時点で政権を握っている）を表していることが他の聖句から明らかなので、すでに過去のものとなっている他の6つの頭には角はない）」である第7番目の獣、つまりリニューアルされたローマ帝国であると言えます。

この度は、一人の皇帝ではなく、10人の元首が一組になって統治する政体として登場します。

厳密に言うと、この海から上がった獣は、7つの頭があるということですから、単純に復興ローマだけを表すものではないことが分かります。（復興ローマは7番目の「一つの頭」に過ぎません。

ですから、黙示録のこの海起獣はダニエル4章の「4頭の獣」の4番目である（既存の動物では比喩できない程、恐ろしい）獣として表されるものとは同一ではありません。

ダニエル7章の4頭の獣について、表記を単純にするために、「第1＝獅子似」の獣を「ライオン獣」と表記。同様に第2を「2クマ獣」、第3を「3ヒョウ獣」、そして第4番目を「4超恐獣」と呼ぶことにします。

「海起獣」はその全体として「7つの頭」すべてを持ち合わせています。それはサタン龍の政治権力のすべてを体現した状態です。

すでに述べたように、その時点での実権があるのは「角」のある7番目の一つだけですが、他の6つの勢力も、歴史の延長線上にあって現在でも、その名残と言うか、何らか影響力を兼ね備えているといえるのでしょうか。

特に、終末において、影響力を持つのは、ダニエル2章の金の像の場合、山からの石が足元めがけて打ち砕く時、頭、胴体、腕、脚などもその時点で存在しているように描かれています。

また、海起獣もヒョウ、熊、獅子に似ているという表現から、基本的に、終末期の海起獣は、バビロン、メディア・ペルシャ、ギリシャ、ローマという勢力の現代版が絡み合っ構成されているということでしょう。

しかし、黙示13章の記述を見てゆきますと、描写は「そのうちの一つ」つまり10本の角のある「第7の国」だけに注目し、あたかも「海起獣＝第7頭」と読んで差し支えないような書き方がされているようです。

更にはその「第7頭」が奇跡の復活を遂げた後、「海起獣」の数字「666」で、それは「人間（ギ語：[アンスローポウ]； 英：[a Man]を指している」（黙示13:18）と述べて、「海起獣」の本質は、ただ「一人の人間」であるとしています。

なぜ、そのような表現がなされているかと言いますと、終末期＝「70週」の最後の1週＝「7年間」という短い間に、その実体が次第に変化してゆくからでしょう。

ここでその変化を追ってみましょう。

「海起獣」の変貌

まず、海から上がったときには、無傷で「第7頭」に10本の角を持つ、サタンの化身として登場します。

（恐らく直後に）その「第7頭」は致命的な打撃を受けます。そして、間もなく、奇跡的な回復を遂げます。

そのことにより、人々から崇拝されるようになり、「42ヶ月間、活動する権威」を与えられます。

そして、ここに強力なサポーターが現れます。「地から上がる獣」です。

この「地起獣」は「海起獣」の像を作らせ、崇拝を強要します。

海起獣の10本あった角のうち3本が引き抜かれた後、小さい角が生えるという変化が起きます。そして、この角は急成長し、ものを喋り、つまり、この角は、他の角をも凌駕し、獣全体を牛耳ると言うか、海起獣＝小さい角とも言える状況に変化します。

偽預言者である「地起獣」に加えて、さらなる相棒が加わります。

「大バビロン」です。

大バビロンと結託した海起獣はもはや、その色も龍と同じ緋色になっています。

更にはこの大バビロンもまた緋色です。「この女は紫と緋の衣を着て…」(17:4)

この時点で「海起獣」は政治力も、経済力も、崇拜の対象として宗教的にも、そして、情報統制力においても史上最強のものとなっています。

大バビロンは、緋色の獣に乗っていると描写されています。

しかし、イニシアチフは獣の方にあります。女が獣に乗って操っているのではなく、乗せられているのです。

17章7節では「この女を乗せた、七つの頭と十本の角とを持つ獣」と表現されています。

この見解の根拠は、ダニエル書に見出されます。

「その木を切り倒し、枝を切り払え。…ただし、その根株を地に残し、これに鉄と青銅の鎖をかけて、…地の草を獣と分け合うようにせよ。その心を、人間の心から変えて、獣の心をそれに与え、七つの時をその上に過ごさせよ。」(ダニエル 4:14-16)

「大木」によって示されるネスカドネザル(バビロンを表す)は切り倒され、「鉄と銅」の「鎖(たが)」をかけられ、「7つの時」が過ぎる。ということです。

これは解き明かせば、大バビロンは倒され(捕縛され)鉄と銅、すなわちローマとギリシャ、つまり「海起獣」の鎖で縛られ、7年間という最後の1週の終末期に牛耳られ、利用されるということであろうと考えています。※

(※ 補足説明:しかし、これは、黙示録の大バビロンが、完全消滅するという預言とは異なります。この夢の預言では、切り倒された巨木は、ネスカドネザル個人に当てはまったもので、バビロン国そのものが滅んだわけではありません。

そして、根はが残されています。つまり根こそぎされたのではないということは、そこから、新たな新芽が出る可能性を残しています。

実際、ネスカドネザルは、回復し、神の至上性を認めるようになります。

ですから、これはおそらく、バビロンのネスカドネザルは、国民の代表しているのではないかと思います。

つまり、大バビロンの住人というか、そこに囚われていた人々が、大バビロンの崩壊後、千年王国に生き残って、神を賛美するようになることを意味しているのではないかと思います。(一補足説明 終わり)

ちょっと長くなりましたが、「海起獣」の変貌にお気づきになりましたか？

「海起獣」は最終的に「一人の人間」に収斂されているということです。
この一人の人間こそ反キリストであり、「ヒョウ」であるということです。
反キリストのモデルであるシリアのアンティオコス・エピファネスが、ギリシャ（豹）由来だということです。
ですから、この海起獣は全体として「ひょう」に似ているとヨハネは描写しているわけです。

そしてさらに「海起獣」に加担する二人の「相棒」偽預言者と大バビロンが加わり、鬼に金棒的な絶対権力者へと変貌してゆきます。

ここに、「ローマ+ギリシャ」（合体）&「メディア・ペルシャ」 & 「大バビロン」が一斉に揃って「海起獣」の勢力を構成していることがわかります。

これはダニエルの4頭の獣「1ライオン獣」「2クマ獣」「3ヒョウ獣」「4超恐獣」すなわち、「バビロン、メディア・ペルシャ、ギリシャ、ローマ」の全部の集合体です。

しかも、まだ別の要素があります。

それは、そもそも「メディア・ペルシャ」が当初から合体国でした。

ダリヨスとキュロスの共同統治でした。ペルシャのキュロス王は大帝国であったメディア王国を滅ぼしてその属国としての立場が逆転しましたが、キュロスはダリヨスの支配権を剥奪しなかったのです。

つづく

「終末期のキャストの正体とその構成要素 2 一偽預言者とは」をご覧ください。